学校教育のDX推進に向けた有識者会議（10月19日）概要

概要

学校教育のDX推進に向けた有識者会議（第2回）

日時：令和8年10月19日（月）13時から15時まで
場所：都庁第二本庁舎10階201・202会議室

〈議題〉
【テーマ1】 AI時代に求められる資質・能力と学び方のあり方
【テーマ2】「新たな教育のスタイル」を踏まえた学習・評価データの利活用のあり方
【テーマ3】教職員の働き方を支える校務DX環境のあり方

〈次第〉
1　東京都教育委員会教育長挨拶
2　事務局資料説明
　・有識者会議 第1回の振り返り
　・東京都学校教育情報化推進計画 改定について
3　委員意見交換

有識者会議における委員の発言（要旨）
（1）AI時代に求められる資質・能力と学び方のあり方

発言要旨
生成AIの位置付けと活用の方向性 ・ AI時代になっても求められる資質・能力の本質は変わらないため、AIを技術としてどのように活用するかという視点が重要。 ・ 生成AIは万能ではなく苦手な分野も存在するため、全幅の信頼を置くのではなく、教育目標に基づいて活用方針を検討することが必要。 ・ レポート等が生成AIで容易に作成できるため、何を評価したいのかという目的に立ち返り、目的に合う評価を行うことが重要。 ・ 情報整理にはAIを活用しつつ、課題設定、検証や表現は人間が担うなど、AIを使う領域と使わない領域を整理することが重要。活用方法を一般化・標準化することで、誤った利用を防ぎ、教員にとっても教えやすくなる。 ・ 情報漏洩リスク等の最新動向を踏まえたリテラシー教育や、AI活用に向けた倫理教育の実施が必要。
探究的な学びと問いの設計 ・ 学習者が主体的に問いを立て、AIも活用しながら学びを深められる環境づくりが望ましい。学びの伴走者として教師自身も問いを立てられるようになるため、AIを壁打ち相手として活用できる仕組みがあるとよい。 ・ AI活用により、探究的な学びにどのような効果が生じるのか見極めが必要であり、AIを活用した探究の実践事例やグッドプラクティスを蓄積していくことが重要。 ・ 調べ学習に留めるのではなく、学習者の行動変容につながる学習設計が重要。

有識者会議における委員の発言（要旨）
（1）AI時代に求められる資質・能力と学び方のあり方

発言要旨
教員の役割の変化と教員を支える環境整備 ・ AIを使う場面と使わない場面を設計し、学びの場を構築する教員の役割が一層重要になる一方、学ぶ時間を確保するため、教員の業務負担軽減やICT支援員、AI支援員等の支援体制の充実が必要。 ・ ガードレール付きAIを活用する際には、AIが担う部分と教師が担う部分の整理が必要。 ・ 教員養成課程において、AIやデータサイエンス等を学ぶ機会が不足していることも課題。そのため、新任教員を対象としてAIやデータサイエンス等を利活用した教育のあり方を普及させる取組等も必要。 ・ AIを活用する教員による実践共有の仕組みづくりが必要。
フィジカルAI人材の育成 ・ フィジカルAIを導入するにあたっては、高度なエンジニアだけでなく、課題認識やデザイン、データ分析など多様な役割を担う人材が関わることが不可欠。機械が得意でない生徒も含め、それぞれの強みを発揮し、成功体験を得られるような育成プログラムの設計が重要。 ・ フィジカルAIの活用には大学数学等の高度な知識が必要であるため、トップ層向けの高度なカリキュラムとして構築することも一案。一方で、マイクロビット等の簡単なプログラミング学習ツールを用いた教育から始め、後続の教育課程につなげるといった内容でカリキュラムを検討することも考えられる。 ・ フィジカルAIについては、生徒が自ら社会課題について考え、データを収集・分析しながら学びを深めていくことが重要であるため、企業・大学との連携や、専門的な知見を有する関係機関との連携も重要。

有識者会議における委員の発言（要旨）
（2）「新たな教育のスタイル」を踏まえた学習・評価データの利活用のあり方

発言要旨
デジタル教科書・CBT・LMSを活用した指導改善・学習者支援 ・ 学習結果をAIに分析させることで、学習者自身が得意・苦手を分析し、次の学習をコントロールする機会を失わないか、自己調整学習との関係について検討が必要。 ・ 問題作成や採点への生成AI活用には可能性があるが精度に限界があるため、人による確認を前提とすべき。 ・ 目標につながる問いや評価課題、学習過程のデザインを先生が行う際に、AIが支援する仕組みがあるとよい。 ・ 生徒本人だけでなく、教員や家庭とも情報を共有できるようにするほか、社会に出た後も、自分の強みや学びの履歴を振り返るための情報として活用できるようになると大きな価値がある。
CBTを活用した学習評価のあり方 ・ 定期考査におけるCBTの活用は、評価に関わるため、受験環境の公平性、カンニング対策など小テストと異なる環境整備について十分な検討が必要。 ・ 現在の定期テストは教員の採点後に点数や平均点が出る流れであるが、単元ごとの学習を繰り返しながら、その結果を個別に把握できるような仕組みが構築されるとCBTの活用価値が高いと考える。 ・ 入学者選抜におけるCBT活用については、定期考査以上に整理すべき論点が多いことから、まずは小テストや定期考査における課題の整理・検証を行い、その上で検討を進めるべきである。 ・ 多肢選択式問題への評価と、記述式問題やスピーキング問題などのパフォーマンス評価には測定できる能力の側面に違いがあることから、評価目的に応じた適切な使い分けが重要。そのために、どのような能力をどのような方法で評価するかというテストリテラシーを正しく身につけ、全体の評価設計に基づく作問が必要。

有識者会議における委員の発言（要旨）
（2）「新たな教育のスタイル」を踏まえた学習・評価データの利活用のあり方

発 言 要 旨
LMS・AIによる個別最適な学習支援 ・ 生成AIの得意・不得意に留意したうえで、個別最適な学びの支援のため、AIによる学習方法の助言やヒント提示、類題作成等での活用が考えられる。 ・ 学習結果の点数だけでなく、学習者一人ひとりの強みや弱み、今後どう伸ばすべきかが分かる形でフィードバックすることが重要。正解のない課題について考える力を育てるため、自分なりの考えを記述する機会を設け、AIが補助的にフィードバックを行うことも一案。 ・ AIによる学習データの分析を通じ、次の授業設計に関する示唆を教員に提示し、指導改善を支援することが重要。 ・ 学習者自身が学びの楽しさや成長実感を得ながら自己調整学習を進められるよう、学習者視点でのAI活用が重要。 ・ 学習ログを活用して学習者のつまずきや特性を分析し、個別最適な学びにつなげる研究や、AIが助言し学習者自身が学びを振り返り、自らの成長のストーリーを構築するデジタルポートフォリオの研究が進められている。学びの楽しさや成長意欲を後押しする仕組みが重要。

有識者会議における委員の発言（要旨）
（3）教職員の働き方を支える校務DX環境のあり方

発言要旨
校務効率化に向けたAIエージェントの活用 ・ AIエージェントの導入に当たっては、どの業務に適用するのかを見極めることが重要。まず業務の棚卸しを行う必要があるほか、AI利用を前提とする意識改革も必要。 ・ AIエージェント活用に際し、毎回個人情報の匿名化や機密情報の分別を行うと教員の負担が高まるため、個人情報や機密情報をある程度扱える環境下で実装することが教員の業務負担軽減に貢献すると考える。 ・ AIエージェント等による業務負担の軽減は重要であるが、生み出された余白をどのように活用するかを明確化するべき。
暗黙知の共有とRAG整備 ・ ベテランの教員が減る中、若手の教員が増えているため、暗黙知は重要であると考える。暗黙知をデータ化する際に、ベテラン教員自身にもメリットとなるような仕組みが重要。 ・ 暗黙知を聞き取ることは難しいため方法が重要。企業ではAIが言語化プロセスを支援する取組を進めている。ナレッジや業務フローの整理が可能であり、AIとの対話が成功要因となっている。 ・ AIチャットボットを構築し、ログをデータとして蓄積し、データを基にどこに多くの方が疑問や不明点があるかを明確化した事例がある。QA形式のログを蓄積することも重要で、個人に依存している知見を共有財産として組織的に活用できる仕組みづくりが重要。 ・ RAGは構築してからの運用が非常に重要。データの更新や回答の検証等が導入後の運用において必要。教員による対応だけでは困難であるため、外部人材も活用しながらサポート体制の構築が必要。

有識者会議における委員の発言（要旨）
（3）教職員の働き方を支える校務DX環境のあり方

発言要旨
校務支援システム連携 ・ 情報漏洩問題が多く発生しているが、ユーザーアカウントの乗っ取りなど正規のルートでデータが盗まれているため、対策が難しい。校務支援システムと他システムとの連携に当たっては、情報漏洩リスクを十分に踏まえ、必要な情報のみを共有することや、被害を最小限に抑える仕組みを含めたセキュリティ対策を講じることが重要。 ・ 現状では中学校から高等学校へのデータの連携は困難ではあるが、中学校時代の不登校情報等が連携されると高等学校における指導をスムーズに行うことができる。 ・ 校務データの構造化・標準化を進めるとともに、都と区市町村の間の情報共有がチャット等で行うことができると業務負担の軽減につながると考える。